

総論

# 日清戦争から十年…… 維新の総決算に 決然と挑んだ明治人の魂

明治三十七年（一九〇四）、日本は超大国ロシアと戦端を開く。しかしそこに至る経緯は、日露二国のみでは語れない。なぜなら、清国と朝鮮の動向が大きく影響しているからだ。十年前の日清戦争で血を流した意味がほとんど失われたうえ、ロシアの脅威に直面するという最悪の事態を迎えた明治日本。この時、日本人を無謀ともいえる戦争に踏み切らせ、奇跡的な勝利をもたらしたものは何であったのか。

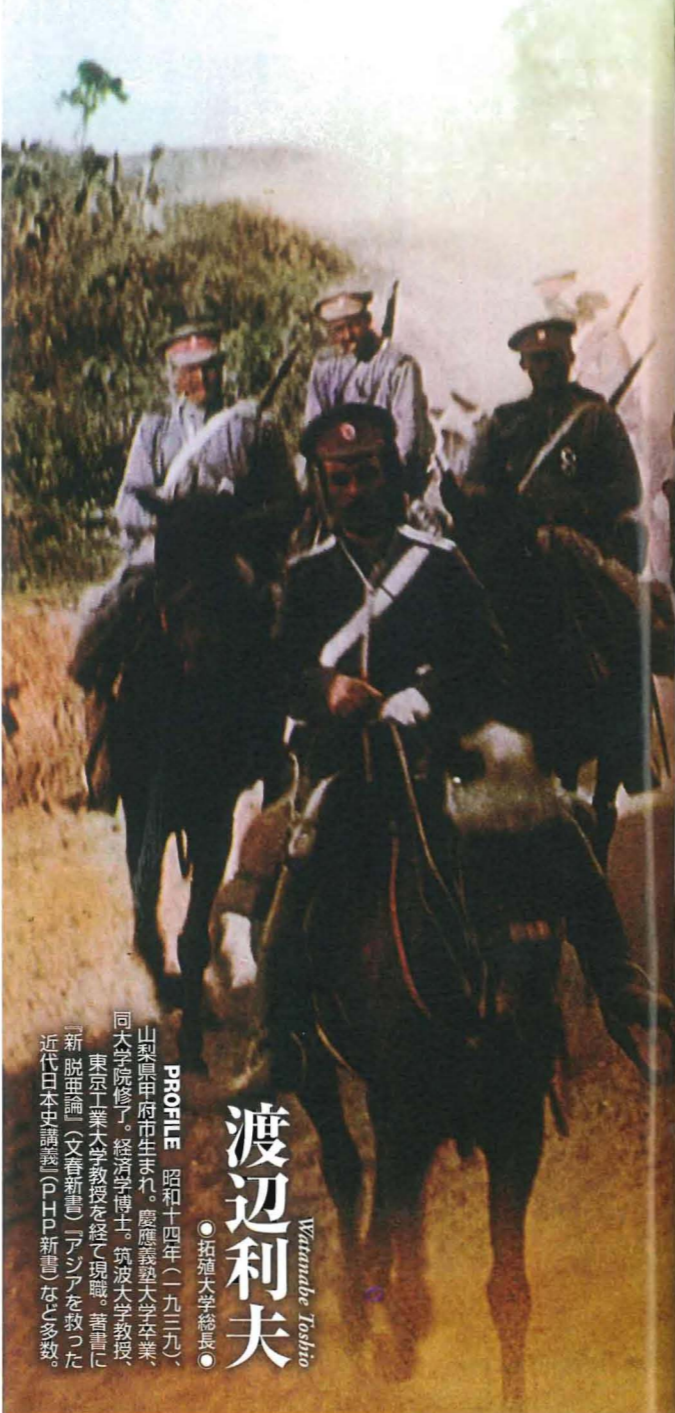
## 日清・日露の「連続性」

百十年前の明治三十七年（一九〇四）、日本は超大国ロシアに戦いを挑みました。「日露開戦」です。双方の戦力は海軍においておよそ二倍、陸軍では十五倍もの差でロシアが上回っていたのです。ロシア皇帝ニコライ二世の「小猿が朕に戦争を仕掛けるなど、帽子の一振りだけで片付けてしまおう」という言葉が、両国の力関係を如実に物語っています。

なぜ明治人は、「無謀」ともいえるロシアとの戦争に挑んだのでしょうか。

日露戦争は帝国主義を推し進める後発の日本が、大陸に植民地を求めるための戦いであったと教えられてきた人も少なくないでしょう。しかし真実は、ロシアの南下政策が極東アジアに政治変動を引き起こし、日本は自存自衛のために開戦を余儀なくされた、ということににあります。

ここでいう「極東アジアの政治変動」を捉える上で、見逃してはならないポイントがあります。ロシアに易々と付け入る隙を与え、侵



## 渡辺利夫

Watanabe Toshio

● 拓殖大学総長  
PROFILE 昭和十四年（一九三九）、山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。著書に「新脱亜論（父春新書）」「アジアを救った近代日本史講義（PHP新書）」など多数。

略を許した清国、そして朝鮮（一八九七年明治三十年に大韓帝国と国号を改称）の存在です。なぜ彼らは、ロシアの魔の手に屈したのでしょうか。

背景を知るには、日露戦争の十年前、明治二十七年（一八九四）に勃発した日清戦争からの流れを見る必要があります。実は日露開戦は、日清戦争との連続性で捉えなければ、その本質は浮かび上がってこないのです。

そもそも日本が日清戦争に踏み切ったのは、欧米列強の侵略を前に、朝鮮を「独立自主」の国家にするためでした。朝鮮半島は、ユー

ラシア大陸から日本の脇腹に突き付けられた「一本の鈍」のような形状をしています。そのため日本にとっては、朝鮮半島が敵対勢力の影響を強く受けたり、ましてやその占領下に置かれることは許すことができません。日本が今も抱える地政学上の宿命であり、「朝鮮半

島は日本の生命線である」という山県有朋の言葉は、今日なお真実なのです。

日清戦争前の朝鮮は清との宗属関係にあり、独立国家ではありませんでした。要するに朝鮮は清の臣下であり、清の強い政治的影響下に置かれていたのです。一方の清も、列強にすでに蚕食され始めていました。この不安定な構図の中で、日本は一刻も早く朝鮮を独立させて、朝鮮との連携により列

強の脅威を撥ね退けなければなら  
ないと考えます。明治維新を経て  
きた日本にすれば、朝鮮を真つ當  
な近代主権国家にすることが、自  
分たちの責務だというのが指導者  
たちの考えでした。

しかし、朝鮮は独立への気概に乏  
しく、清も旧来の冊封体制を墨守  
して、朝鮮の独立を断乎として認  
めません。さらに朝鮮内には、ロシ  
アに傾斜する勢力まで現われます。

このままでは朝鮮は列強に侵さ  
れ、日本は危機を迎える……。や  
むなく日本は朝鮮の独立を認めな  
い清との戦いに踏み切り、これに  
勝利を収めたのです。明治二十八  
年（一八九五）四月に締結された下  
関講和条約の第一条には、次のよ  
うに記されています。

「清国ハ朝鮮国ノ完全無欠ナル  
独立自主ノ国タルコトヲ確認ス」  
講和条約とは面白いもので、第  
一条を読めば、その戦争の主眼が  
ほぼ分かります。この一文から、日  
本が日清戦争を戦った理由が明確  
に読み取れるものと思われれます。

## ロシアに蚕食される 二つの隣国

それでは日清戦争後、清から独  
立した朝鮮は日本の期待通り、近  
代化に向けての維新を果たしたの  
でしょうか。

確かに戦争直後は日本の後押し  
もあり、朝鮮国内で改革が進めら  
れました。国王高宗や閔妃など守  
旧派勢力の反発はあったものの、  
近代化への道を歩み始めたかに見  
えました。

それをぶち壊したのが、三国干  
渉です。ロシアがドイツ、フラン  
スを誘い、日本に対して下関条約  
で割譲された遼東半島を、清へ還  
付するよう要求してきたのです。

ロシアの狙いは何か。そもそも  
当時のロシアが南下政策を採った  
のは、不凍港（冬でも凍らない港）  
獲得が目的の一つでした。彼らに  
とって、遼東半島南端の旅順・大連  
は垂涎の的であり、これを弱小国  
日本の手に渡すなどもつてのほか

——。そんな魂胆から、露骨な横  
槍を入れてきたのです。もちろん、  
日本の大陸進出を牽制する目的も  
ありました。

ロシアのウイッテ蔵相は、当時の  
ことを次のように述懐しています。  
「ロシアのためには、強大ではあ  
るが活動的素質のない支那（清国）  
を隣接国としていることが最も利  
益である。（中略）故に日本をして  
大陸に根幹を張り、遼東半島の様  
な或る場合には北京の死命を制す  
るに足る地域を領有させることは、  
到底我々の容認しえない所である」  
〔ウイッテ伯回想記「原書房」〕

ロシアの思惑を簡潔に言い切っ  
ています。こうして、日本は屈辱  
的な遼東半島放棄を余儀なくされ  
たのです。

すると、それを見た朝鮮は「日本  
恃むに足らず」と約交します。これ  
は「事大主義」という朝鮮独特の考  
え方に因るものです。事大主義と  
は「大に事える」の意味です。朝鮮  
は歴史上、その時々々の強国に阿り、  
国の安泰を図ってきました。かつ

ては明と清、日清戦争後は日本で  
す。そして——三国干渉で日本を  
侮り、清をも見限った朝鮮は、よ  
り強大な国、ロシアへと事大の対  
象を変えました。

朝鮮内では親露派の勢力が日に  
日に大きくなり、彼らは朝鮮を影  
響下に置こうとするロシアの肩入  
れを得て、親日派勢力の駆逐に乗  
り出します。一八九六年（明治二十  
九年）、ロシアはなんと、朝鮮国王・  
高宗をロシア公使館に移住させ、そ  
こから詔勅を出させるといふ暴挙  
に出ました（「露館播遷」）。「国辱」  
とも言わべき出来事ですが、朝鮮  
は甘んじて受け入れ、国内改革へ  
の動きは、ここに完全に潰えます。

朝鮮の維新を願い、自ら血を流  
した明治人の落胆ぶりは、いかば  
かりだったでしょうか。朝鮮にも、  
金玉均らのような改革の士も確か  
に存在しました。しかし改革への  
動きが維新へと繋がることはあり  
ませんでした。私はこれを、朝鮮が  
血縁を重んじる宗族（父系親族集  
団）社会であり、宗族と宗族を繋ぐ



「下関講和談判」（永地秀太画、聖徳記念絵画館蔵）。卓の向こう側、右端から伊藤博文、陸奥宗光。伊藤の対面が李鴻章

横のネットワークが存在していな  
かったからだと考えます。日本で  
は、反目する薩摩と長州であつて  
も、維新のためならば手を取り合  
いました。しかし、朝鮮の宗族間に  
「妥協」の二文字はありません。改  
革を志す人物が現われても協力者  
に恵まれず、最後には孤立するの  
です。朝鮮に真のナシヨナリズムが  
いつまでも生まれえないのは、こうし  
た社会的背景が大きいのでしょうか。  
日本の願ひも空しく、朝鮮では  
ついに維新は起きず、一八九七年  
（明治三十年）に「大韓帝国」と国号  
を改めたものの、その実はロシア  
の傀儡国家と墮すのです。  
一方、清もまた主権国家意識は  
極めて低く、諸々とロシアの侵略  
を許します。一八九六年に締結さ  
れた「露清密約」は、対日相互防衛  
同盟という体裁を取ってはいたも  
の、ロシア軍の満洲駐留や東清  
鉄道の建設、治外法権を認めるな  
ど完全な不平等条約でした。清の  
全権大使は李鴻章でしたが、多額  
の賄賂を受け取っていたともいわ

れます。「老いたるかな、李鴻章」  
と嘆かざるを得ません。  
その後、ロシアは日本が三国干渉で手放した旅順・大連を獲得し、一九〇〇年(明治三十三年)の北清事変後には満洲全土を不法に占領、極東アジアにおいて決定的な優位に立ったのです。

## 「明治維新の総決算」として

清はロシアに侵され、朝鮮独立の芽も摘まれた……。日本が日清戦争に託した理想は完全に消滅しました。ロシアの脅威が一層切迫したことを考えると、状況はむしろ悪化したというべきでしょう。「何のための日清戦争だったのか」という慙愧の思いに駆られたはずは、同時に日本人は、このままでは「明治維新」の意味までもが失われてしまう、という深い危機感を強く持たされたのでしよう。

日本が明治維新を断行したのは、列強に伍する近代主権国家を築くためです。当時、国民の誰もが現代では考えられないほどのリアリズムを持って国難に立ち向かい、文字通りの「総力戦」を見事に成し遂げたのです。

私は、明治日本が隣国と最も大きく異なるのは、実にフェアで鮮やかな人材起用が至るところで行なわれたことにあると思います。開戦直前、児玉源太郎が平然と「降格人事」を容れ、また東郷平八郎が連合艦隊司令長官に「抜擢」されたことは人口に膾炙していますが、これは一例に過ぎません。明治日本は、いずれの列強よりも合理的な人事を行なっています。

榎本武揚は、戊辰戦争では旧幕府軍の中心として最後まで新政府軍と戦い抜いた男です。しかし維新後、彼は裁かれるどころか、能力を買われて海軍卿をはじめ様々な要職を歴任しました。薩長の間からすれば「賊軍」の象徴ですが、その才覚が明治日本の役に立つならば、敵方の人間だろうが貧乏人だろうが、誰でも登用されたので

ためでした。「眠れる獅子」清がアヘン戦争を機に列強に侵されるのを目の当たりにし、黒船来航以降、列強との不平等条約締結を余儀なくされた日本は、厳しい現実の中で、国家の「独立自主」を守るべく維新を成し遂げたのです。しかし、このまま座してロシアの極東侵略を許せば、日本の「独立自主」さえ危うくなるのは明白です。

日本を存続させるためには、ロシアを恐れるだけではなく、果敢に挑む必要があるのではないかと。こうした国民のセンチメントが少しずつ昂揚していくのも、無理からぬことでした。明治三十四年(一九〇一)末、外相の小村寿太郎は元老たちに「露の満洲に於ける地歩は益々固く、(中略)満洲既に露の有とならば、韓国亦自ら全ふする能はず」と認めた意見書を提出しています。もはや、誰もがロシアの脅威を肌で感じていました。そしてここからが、明治の人々の真骨頂です。私は明治という時代に「恋」にも似た感情を抱いてい

ます。日本全体が、近代化という一つの方向に向かっていったことが実によく分かります。

また、列強の脅威を心底感じ取っていた明治人は、日本は小国であり、これから進む方向に寸分でも狂いがあれば国が減じるという意識を常に抱いていました。幕末動乱の修羅場を潜り抜けてきた人間ばかりです。皆が武士道を宿し、戦術や人間操縦術にも長けていました。だからこそ強烈な危機感とリアリズムをもって、「国のために何をすべきか」に合理的な決断を下すことができたのです。

特筆すべきは、「国難」への危機意識をリーダー層のみならず、国民全体が共有していたことです。開戦前、最大の懸念は戦費調達でした。軍費は総歳出の五十パーセントを超え、政府は窮余の策で非常特別税として地租などを増税、また煙草と塩を専売制とし、通行税などを超える新しい税も案出しました。もちろん国民の暮らしは目に見えて苦しくなります。そ

れでも人々は、「これで建艦が進むのなら」と稗と粟でしのぎました。宮廷の歳費までも戦費に充てられ、まさに「拳国一致」で開戦に備えていったのです。

同時に明治政府が、最後まで戦争回避に向けて努力したことにも留意すべきでしょう。小村外相は開戦前年にあたる明治三十六年(一九〇三)に、幾度となくロシアに協定案を送りました。「一朝事あらば」と開戦の準備は進めますが、それは安全保障上の当然の備えです。戦力で大幅に劣る日本からすれば、戦わずに済めばそれに越したことはありません。しかし……。ロシアは日本の案に些かも耳を貸すこととはなく、むしろ時間稼ぎのため

に返答を遅らせに遅らせたため、明治政府は「このままではロシアの戦争の準備を整わせるだけ」と開

戦を決意。明治三十七年(一九〇四)二月より、一年半にわたる死闘を繰り広げていくのです。

日清戦争から十年……。日本は苛烈な国際情勢の中で独立を脅かされながらも、決然と立ち上がりました。列強の脅威を取り除くという日清戦争で果たせなかった願い、そして維新の精神を守り抜く覚悟……。明治人はこうした想いを胸に、「明治維新の総決算」とも言うべき日露開戦へと突き進んだのです。

国難の前に、明治の人々を奮い立たせた「日本人のDNA」は、私たちも間違いなく受け継いでいます。現在の日本が困難な国際情勢下にあることは明らかです。明治人の姿から、脈々と受け継がれている「日本人のDNA」が覚醒されることを願ってやみません。

開戦後、旅順攻囲戦で威力を発揮した28センチ榴弾砲。遠く空に消えてゆく砲弾の影が見える (ShaunDale, Wwww.BurtonHolmes.Com 所蔵) パートンホームズコレクション™

